

書 評

松本正夫著 存在論の諸問題

——スコラ哲学研究——

490頁 岩波書店 1967

牛 田 徳 子

これは1952年から1965年の間に発表された形而上学，神学，論理学，認識論，倫理学等の問題に関する著者の哲学的論文集である。従って著者の最初の著作『「存在の論理学」研究』（1944年）のように単一のテーマのもとに整然と記述された完結的体系ではない。しかしここでもまた著者の同じ体系的精神の営みが貫ぬかれていることは何人も疑うことができないだろう。ここにあるものはすべて或る目に見えない、途方もなく龐大な体系の一部である。『「存在の論理学」研究』もまたこの体系の一部である。しかし他方人はこの近年の労作のなかにかつての労作とやや異なった特徴を見出すこともできる。印象批評的に一言でいうならば前作が教科書的教説であったのに対し、これは論争的教説である。すなわちここでは著者はたえず経験論的實在論か先験論的觀念論かの二者選一を迫る。これは単に弁証的精神の方法的操作ではなくて著者の哲学体系の糸口である。存在論の重層的構造理論を縦糸とすれば経験的實在論はそれを織り上げてゆく一本の横糸である。いかなる存在論的問題を構成するに当たっても著者はそれと先験的觀念論—古典客観主義的なそれであれ、近代主観主義的なそれであれ—との対決を惜しまない。この意味でこの著作は論争的でありまた現代的である。しばしば著者の語るとくあたかも永遠のごとくみえる体系も時代的精神の制約をまぬがれない。この本に集められた論文の一つ一つを紹介することは限られた頁数をもってしては不可能であるので、わたくしは敢えて上記のごとき視点に立った総合的論評—それが必ずしもここに盛られた問題をすべて解説しうるわけではないが—を試みたい。

著者の立場はまず客観主義的乃至形而上学的構成理論が経験的實在論に即してあらねばならないことにある。換言すればいかなる対象の構成理論も経験的法則に従って合法則的整合性をもたねばならない。もちろんここでは哲学の立場であるから経験的法則といっても自然科学のそれだけでなく、経験の一般法則というべきである。アリストテレスがつねにいうごとく形而上学的構成はわれわれにとってより知られるものからより知られざるものへの理論認識であるから、それが統一的に使用するところの実存と本質、形相と質料、機動因と目的因、現実態と可能態等の原理的概念はまずわれわれにとって最も知られる物質領域を構成し、その領域に妥当する論理（本質的範疇認識）の整合性と経験（実存体験）の検証を得て初めて有効になる。このような形而上学的構成はつぎに生命領域に、さらに精神領域におよび同様の有効性を得る。形而上学的理論は最下部の物質領域の構成から発して上積みされてゆくに従ってその経験的有效性を漸次加増してゆく類比的な實在構成理論である。すなわち形而上学的物質論は物質の生滅交替の弁証法的構造を明らかにし、形而上学的生命論は植物・動物の自己進化発展的生命構造を明らかにすることによって、ともに自然的存在者の可変の本質構造を明らかにする。さらに形而上学的精神論は精神の対自的不変位格的理性構造を明らかにし、しかもなおそれが可滅的実存性をまぬがれないことを明らかにすることによって、一切の自然的存在者の可滅的存在構造を明らかにする。このようにして獲得された形而上学的自然論、世界論はその積み重ねられた類比的経験有効性をもって経験に直接与えられない存在領域の構成の手掛りを提供する。すなわち形而上学的天使論、神論は、下部領域に見出されるごとき論理整合性と経験検証性を得られないが、少くとも形而上学的自然論そのものを類比的に自らの有効性となしうる。かくて形而上学的天使論は人間の精神から類比される単純、英知的精神の構造を明らかにし、形而上学的神学は一切の実存有限的存在から類比される絶対者の構造を明らかにすることによって、間接的に経験的實在論でありうるというのが著者の主張である。

形而上学的理論はこのようにしてつねにより経験的な理論を土台にして進んでゆく類比的理論体系であって、このかぎりですでにその経験實在論的性格を或程度納得せしめる根拠を自らのうちにもっているが、著者の立場はさらに論理と経

験に形而上学的構成理論の経験實在論的性格を保証する理由と原因を求める。まず経験は外的感覚において物質の実存体験が生ずるところに発し、ついで内的感覚においては生命の実存体験が生ずるところに成立する。経験はこのようにまず感覚の受動直観的自明的所与にその源泉をもつ。さらに経験は体験的意識の志向が自らの根源に向うことによって精神の実存体験が生ずるところにも成立しうる。このように形而上学的記述は少くとも三つの存在領域についての経験の所与を多かれ少かれ獲得し、それに依存しているのであって、けつして虚像の構成でもなければ先験的綜合でもない。経験が実存体験に負うとすれば論理は実存体験によって獲得された経験所与の本質認識（抽象認識）に負う。すなわち特定の領域対象についての概念的抽象から導出された範疇原理がその特定の領域の存在様式の受動直観的、自明的理性所与である。実存体験の領域が広がるについてこの範疇原理はその形式を保存しながらその外延性を類比的に拡張せざるをえない。かくて存在重層的な経験所与に対応して類比的な存在様式の範疇所与が獲得されるのであって、これによって形而上学的記述は整合な理論形式を得る。従って論理はあくまで事物の存在様式であって、けつして先験の様式でない。このようにして形而上学的構成理論は、経験所与に依存し範疇原理に依拠して構成される対象の諸命題を基礎にし、この命題が個別的事実によって検証されてゆくに従って、理論全体の有効性を高めてゆくのである。従って形而上学的認識作用はたえず経験より始まり経験で終る理性の営みであって、これを積み重ねてゆくことによって漸次信頼するに足る形而上学的理論像が形作られてゆく。

しかしながら著者の意図は形而上学の客観實在論的性格がたんに実存体験であれ本質認識であれ、経験的所与の自明性に基礎付けられることで満足しない。なぜならば形而上学が客観論であるならば、1.それは意識があってもなくてもそれ自体として存在するいわゆる「物自体」を前提しており、2.意識に与えられた所与の自明性是对自的にも即自的にもそのような物自体を証明しているわけではないからである。従って意識の自明的所与は、たとえそれが意識されようとされまいとそれ自体確かかつ非任意のものであっても、またその経験性が實在を明示しているかのように思われても、主観の範囲を一步も出していないのであって、ここにたとえば夢のなかの経験なり先験的所与なりの神話が復活する恐れがある。

ここで著者の立場は経験实在論的形而上学の最後の基礎付けとしてそのもの自体後驗的な手続きをおこなう。すなわち構成された命題乃至理論はそれ自体任意、非自明であるが故に仮設であってその真偽を決定する検証を必要とする。度重なる検証に堪えた有効な構成を獲得したときわれわれはその構成が実在に対応する模写である確信をもつにいたる。むしろ事實は検証を要求するいかなる構成もすでに「物自体」の仮設をそれ自身のうちに含んでいるということである。さもなくば検証を要求することもない筈だからである。従って或る構成の仮設が有効になればなるほど、そこに含まれた特定の物自体の仮設も有効になることになる。従って異なった領域の構成の同様の有効性が得られれば得られるほど形而上学が扱う対象の物自体性の確信が得られてゆく。以上からいえることは形而上学的認識が始まるのは「物自体」乃至实在を仮設したときなのである。この仮設はいかなる手続でもって正当化されるか。

命題的構成がその真であることの確証を得るために実存体験による検証を要求することは、まず第一に意識の任意な作用に独立な、そして意識に与えられる非任意の客觀的事実を想定しているということの意味する。ここにそのことが意識されようとされまいと自体的に知られている实在乃至存在が意識に対してあるという推定が成り立ちうる。ところで命題構成が真もしくは偽になる蓋然性を確實にもつのはその基本的構成要素が概念段階において少くとも即自的に真であるからである。なぜならば要素概念が客觀との対応性、相似性をもっていなければ、命題構成は無限定に拡大されてしまつて、その真偽にまたがる対応可能性を真にも偽にもならない対応不可能性から守ることができなくなるからである。ところで即自的に真であらねばならない要素概念は意識に与えられた非任意の本質的所与であつてこれがさきに述べた非任意の客觀的事実の領域に事実上生れた認識的事態であつたといわなければならない。ところで対象の認識的事実は認識される事実があつてもなくても対象はそれ自体としてあることを想定せしめる。すなわちここでふたたび、知られても知られなくても、意識があつてもなくてもそれ自体としてある实在乃至存在の推定が成り立ちうる。少くとも真を意図する命題構成は客觀的事実としての「知られる实在」を仮設的に含意しているのみならず、客觀的存在としての「实在」を仮設的に含意しているのである。それは構成がそ

の真偽を訴えるところの実験的検証過程がこの最後の仮設に立っていることから明らかである。

このようにして物自体概念は形而上学的構成理論の第一歩であると著者は説く。これはアポステリオリに有効性を得られることをあらかじめ見越した仮設概念である。これは幼い子供や未開人が漠然とそしてやや非能率的に使っているごとき物自体概念と、意識的かつ科学的に使う差こそあれ本質的に異ならない。ここから形而上学の終点である神の構成概念にまで至るには気の遠くなるような精神の長い思弁的進展があったし、これからもあるにちがいない。しかしこれからさき形而上学のどのような未開の境地に進もうと、また形而上学がどれほど有効に実在に切り込んでいることが証せられようと所詮仮設の域を出ないのである。著者の立場はその経験実在論を徹底させることによって仮設に始まり仮設に終ることを暗示するきわめて柔かい存在論になったのである。これを著者の相対主義的変節というべきか。しかし著者は存在論が最終的には最も有効な仮設であることを豪も疑わない。存在論は人類が最も長くかつ最も広くもちうる経験的知識であるということに独断的な信頼を寄せているのである。ここに著者のきわめて楽観的な健全な精神がある。

Jan Pinborg : Die Entwicklung der Sprachtheorie im
Mittelalter. 366 S. 1967, Aschendorff, Münster.

柏 木 英 彦

周知のごとく、中世の *grammatica speculativa* (思弁的文法学) は *modus significandi* (意味の様相) の面から言語を研究するが、思弁的文法学者の著作の多くが *De modis significandi* と題されているところから、彼らはモディスト (*modistae*) と呼ばれる。語が意味を持つのは、精神が音声にある意味の様相を与えることによってである。これによって音声は語、品詞となり、ものの属性を表わす。つまり語はなにかを意味するものとしてのみ研究の対象となる。R. ロ